



2007年

SORA 19号

晴
夜

(19)
—
3

柴
田
佐
知
子

西
瓜
切
る
庖
丁
半
ば
に
て
傾
ぐ

秋
風
や
血
筋
と
い
ふ
も
曲
り
が
ち

母
の
座
の
畳
擦
れ
ゐ
て
盆
の
月

銀漢や昔にもその昔あり

脚折りて花野の牛となつてをり

蛇穴へ地球は自転怠らず

雁や恋ひしきときは椅子深く

無花果の辺り故郷のごと暮るる

捕
虫
網

小林 朱 夏

弟をいつも呼び捨て捕虫網
ビー玉に楕円はあらず雲の峰
金魚売水をこぼさず急ぎけり
百日紅つつかれて散る机上論
覆ふものなく大仏は炎天下
都大路下れば山の影涼し



鬼の面背中に廻し氷菓子

端居して亡き人の指示待ちにけり

大西日背に張りつけておから煎る

帰省の子髭持ち老獐なことを言ふ

卓袱台の仕舞はれ久し雁来紅

蟋蟀や諭すつもりはなけれども

雨のあと蜻蛉の村となりにけり

骨肉の情断ちきつて蛇穴に

祭

笛

苑
実
耶

救はるることなき姿羽抜鶏

早朝の水番姫に委ねけり

梔子の匂ひは一花にて余る

父の忌や姉妹挙りて露をむく

ありつたけの浮人形と子は風呂に

黒南風やとつさには出ぬ誉めことば



魚より海月の重き網を引く

白服や埃かぶりし火縄銃

全国紙飾る郷土の祭かな

地区ごとに演し物があり祭の夜

祭笛毒々しげなりんご飴

蚊帳吊るや眠くなるまで子が騒ぐ

包丁の切れの悪さよ土用凧

水しぶき上るのみなり下り簾

更

衣

高倉恵美子

明日あると信じて種を蒔きにけり

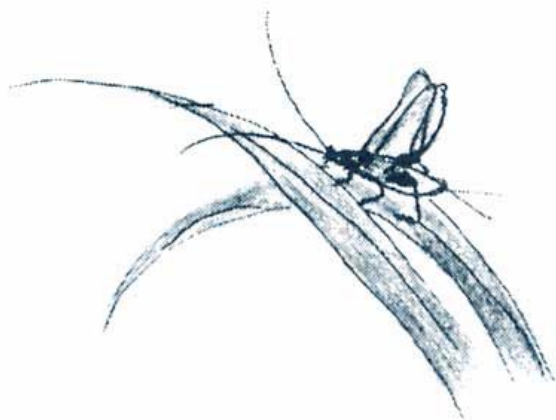
農機具も車のひとつ納税期

どの家も跡取りのみて種洗ふ

蓮華田に蜂蜜取りの来てゐたり

麦藁焼く煙に車止めらるる

近づけば山美しき若葉かな



紫陽花を誉めつつセールスマン来たる

水番も要らぬ田植となりにけり

姿よき初茄子川に捧げけり

更衣この世の名残り少し捨つ

まくなぎに追はれて少し躓きし

道に出て毛虫どこまで行くつもり

注文の包丁届きトマト切る

柿若葉父若き日の男ぶり

連山の麓で夕立終りけり

夏

草

樋口みのぶ

水田より降り出す雨や鷗外忌

まづ父がためしてゐたる石鹼玉

子の丈に並びてとばす石鹼玉

右利きと左利きゐてさくらんぼ

長梅雨やベートーベンのデスマスク

禿頭のあとをつきくる羽拔鶏



傘雨忌や裁縫箱の底の篋

夏草生ふ庭に男のシャツ濡れて

往還の蛇をさらひし大鴉

浴衣着て庭に出てみるだけのこと

指入れてゆび火照りたる提灯花

向日葵に覗かれてゐる胸の内

下駄鳴らす男ばかりや松囃子

八月や錆の噴出す蝶番

日傘より足出て歩く原爆忌